

175. 栗東町中沢遺跡調査抄報

1. 遺跡概要

中沢遺跡という名称での調査はこの地域内において断続的におこなわれており、今回紹介する中沢遺跡はその中の小字宮ノ前に所在する遺跡である。同じ宮ノ前地区内では以前の調査で中世の建物跡が確認されている。しかしこれは、集落となるほどの広がりは見られないものであった。

調査地は栗東町大字中沢小字宮ノ前94-1番地で、対象面積 294㎡、共同住宅建設に伴うものである。

周囲の環境は対象地の脇を小河川が流れ、また北西方向に菟神社をのぞむことができる。さらに遺跡と直接的な関連はないが近隣に関西鉄道草津線が通っており現在でもその名残としての土手が断片的に存在している。

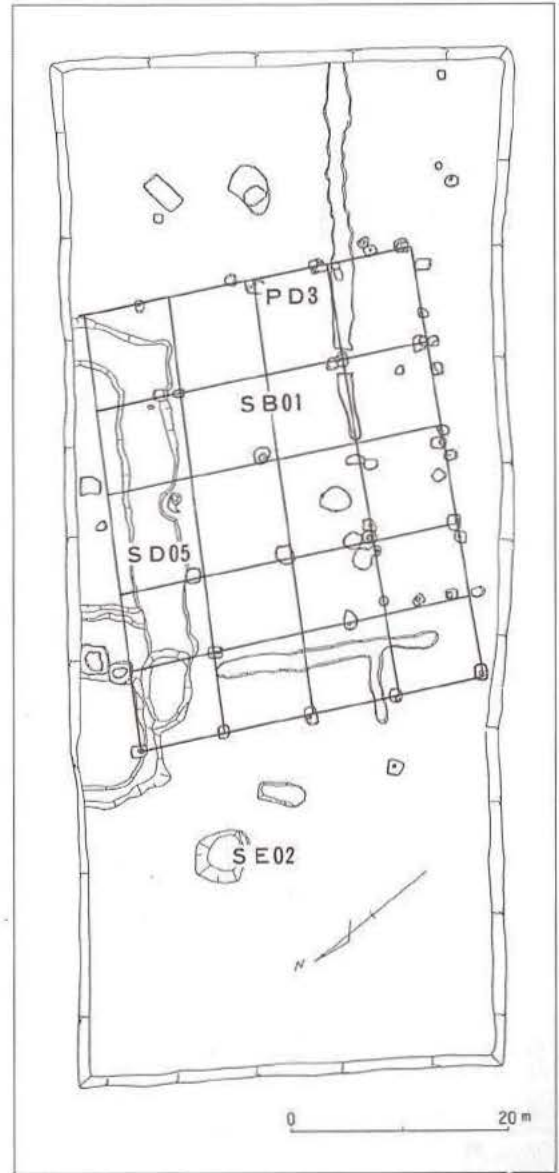
2. 遺構

遺構面は中世一面であった。以下その状況を説明すると、調査地南東側に南北4間、東西5間の建物が1棟(SB-01)とそれに伴う井戸(SE-02)が確認

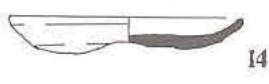
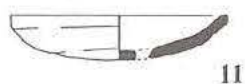
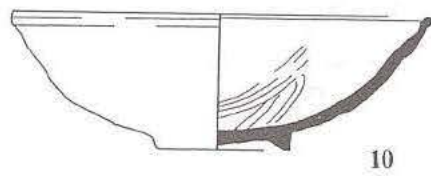
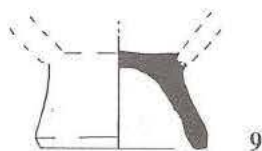
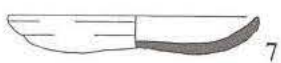
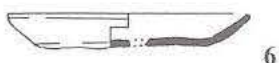
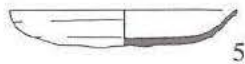
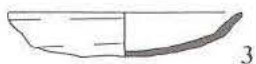
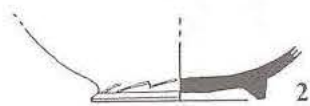
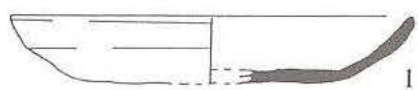
されている。SB-01の柱穴は調査面より70cm内外の深さであり、遺存状態はあまり良くないが、直径7cm、現存長17cmの柱根が発見された。築造時の実際の深さではないもののこの柱穴(P-03)はSB-01の確実な柱痕である。その他のピットについては、残りが悪く、



第1図 遺跡位置図(1/20,000)



第2図 遺構平面図



第3図 出土遺物実測図(1)



深さ・大きさともに確定し難く、SB-01の中の入出口、尻部分などについては不明である。

井戸はSB-01に併設されていたもので、深さ1m50cm、直径1mである。井戸枠らしいものは見られなかった。断面は、遺構面から1mまでは先細りの形を呈し、以下の50cmは砂地であるため30cmほど壁面に入り込んだ袋状になっている。

その他、北側中央部に2m幅平均の溝(SD-05)が一部分みられるが、性格は不明である。この中央部分から土師器小皿が1枚出土しており、時期としてはSB-01との50cmは砂地であるため30cmほど壁面に入り込んだ袋状になっている。

3. 遺物

第3・4図は全てSE-02からの出土である。番号1~9、10~17、18~21、22~25、26~31と5つの集団に分けられ、各々の土器群が上下に層をなすように20~30cmの間隔をもって発見された。完形品もしくは復原しうるものが多いが、遺存状態としては良好とは言えず、土器の表面調整などは摩滅のためほとんど認知し得ない。これらの状況からSE-02出土の土器は廃棄以前に頻繁に使用されたのち、井戸の廃絶の際埋め土とともに入れられたと考えられる。以下、上層部のものからA~Eとし、各々に説明を加えたい。

A(1~9)遺構面下30cmのところから出土した。

1は土師器大皿(口径15cm内外のものとする)、2は黒色土器の底部で、しっかりとした高台である。3~8は土師器小皿(口径10cm内外のものとする)で、3~7には2段ナデ手法が用いられている。6は底が穿孔された土器でこれは焼成以前にあげられたものである。9は土師器の脚台付皿。

B(10~17)10は黒色土器碗、前述のとおり摩滅が著しく、暗文が部分的にみられるのみ。11は6と同様に小穴が穿たれた土師器小皿。12~17も土師器小皿である。

C(18~21)18の黒色土器碗は立ちあがりの内罎が最も顕著なもの。19は土師器大皿、2段ナデ手法である。20、21は同小皿。

D(22~25)22、23は黒色土器碗底部。ともに強くヘラケズリの跡を残す。24、25は土師器小皿。

E(26~31)26~28は黒色土器碗。この中では暗文の残りが最も良い。29~31は土師器大皿。うち30は完形品であるがかなりいびつな形をしている。また共伴して陶質土器の破片が一点出土している。常滑である可能性が高い。

黒色土器はいずれも内面と外面口端部が黒色を呈す



遺物出土状況(SE-02.D)

るもので、内面にはラセン状の暗文が見られる。また形態としては、全体に均整のとれた形をし、立ちあがりやや内罎気味である。口径は15cm内外、全高5~6cmの大きさで、口縁部の沈線が明瞭である。

年代は森隆氏編年の黒色II-4段階、また大橋信弥氏編年の野洲町富波遺跡並行と比定される。

4. まとめ

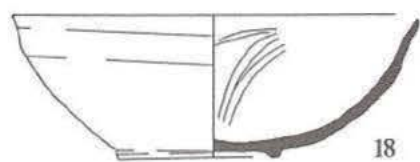
12世紀後半~末頃に中沢という地に存在していた1棟の建物と井戸。これが今回の調査結果である。建物自身の性格がわかるものではなかったが、黒色土器・土師器などの日常雑器が出土するところから、一般的な中世庶民の住居であろう。井戸は現状からでは、素掘りの簡素なものに見うけられるが、埋める際には、土を入れては土器を入れ、また土をかけるといった行為をくり返しており、非常にていねいな埋め方をしていいる。井戸埋納に関する明らかな祭祀の跡、遺物は見あたらないが、穿孔された土器2枚を含むなど、何らかの札をつくしたものではなからうか。類例を待ちたい。また建物・井戸さらに溝という組み合わせから、その配置など建物を中心とした、生活空間としての家の復元を広域的に考えてゆきたい。

尚、末筆になったが、本文報告にあたって、森隆氏の御教示を得た。記して謝意を表したい。

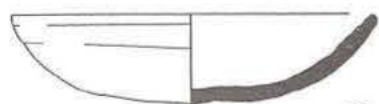
参考文献:

- 『久野部遺跡発掘調査報告書一七ノ坪地区一』滋賀県教育委員会 1977
- 『手原遺跡発掘調査報告書』一栗東町教育委員会、栗東町埋蔵文化財調査団 1981

(橋本 奈保子)



18



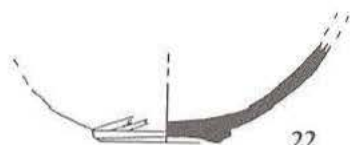
19



20



21



22



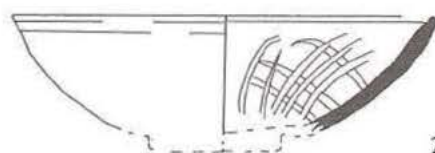
23



24



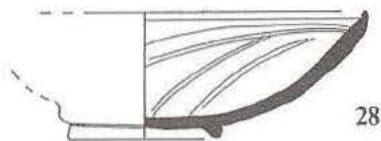
25



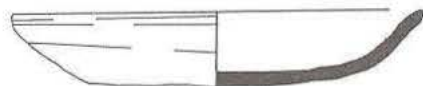
26



27



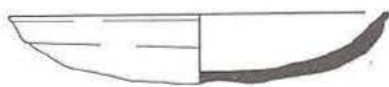
28



29



30



31

第4図 出土遺物実測図(2)

